

# 田中智志・今井康雄編『キーワード 現代の教育学』

田 口 賢太郎

## 1. はじめに

本書『キーワード 現代の教育学』は、東京大学大学院教育学研究科教員である今井康雄氏、また本研究科に2010年度より着任された田中智志氏を中心として編まれ、2009年に出版されたものである。執筆陣には、上に挙げた両編者の他に、本研究科の小玉重夫氏をはじめ、矢野智司氏、山名淳氏、越智康詞氏ら、現在、教育学を牽引している研究者6名が名を連ねている。

まずは手に取った本書の表紙を眺めてみることにしよう。

表紙の上方にはタイトルが大きく印刷されている。その下、つまり表紙の真ん中には、四角く切り取られたイラストが——これとって凝ったものではないのだが、付されてある。緑色の大地に青い空、そして緑と青に挟まれるようにして灰色の建物が置かれている。おそらくこれは学校なのだろう。外壁に掛けられた大きな時計や建物を囲う塀といった、分かりやすく学校らしさを示すものは特に描きこまれてはいないが、「教育」の名が冠された本であることからしても、この建物を学校に結び付けて捉えることは、誰にとってもそう難しいことではない。

そしてイラストからタイトルへと何気なく視線を戻すとき、タイトルとイラストの間を見やると、本書の英語タイトルが密かに記されていることに気づく。〈Unlearn the Education: An Introduction to Educational Theories〉——これを敢えて訳出するのならば、『「教育」を学びほぐす——教育理論への導入』とでもできようか。「学びほぐす」という表現は、鶴見俊輔がunlearnの訳として用いたことばを借り受けたものである(鶴見俊輔、徳永進「鶴見俊輔さんと語る」『朝日新聞』、2006年12月27日付け朝刊、15面)。これは、『キーワード 現代の教育学』といった味気のない日本語のタイトルと、必ずしも一致するものではない。OEDを引いてみると、〈Unlearn〉

とは、「意図的に、既得の知識を念頭から去らせること」となっている。この場合、〈the Education〉が対象となっているのだから、「これまでにわれわれが得てきた教育というものについての観念をひとたび忘れる」、ということになる。なかなか挑発的なタイトルである。では、これまでにわれわれのうちに構築されてきた教育なるものを「学びほぐす」こととは、どういったことを指すのだろうか。それこそ、本書の狙いと関わるものである。本書が編まれた真の目的は、教育なるものに対峙し、これを乗り越えていくこと、またそのための教育理論へといぎなう入門書となることであつたのだ。本書は、単なる教育学のキーワード解説本の最新版であることを超えて、これまでに構築された教育なるものとの新たな関係を築こうとする野心的な書物なのである。

たかだかが表紙ひとつに囚われすぎてしまったようでもあるが、とはいえ表紙は本の顔である。こちらから覗き込めば、相応にその表情は何うことができるものだ。現に、おぼろげながらわれわれは本書の位置づけというものを垣間見ることができたのだから。

## 2. 教育の深みへ

さて、実際のところ、本書の目的は、どこにあるとされているのだろうか。「はじめに」を参照してみよう。従来の教育学の概説書にも載っていたであろう「カリキュラム」といったことばから、近年みられるようになった「純粹贈与」といったことばまで、数々の「教育学」的なことばの「交通整理」(i頁)をすることが一つめの目的としてあげられている。しかし、本書の目的はそれだけではない。

それは、「教育」と呼ばれる営み、とりわけ学ぶ、教える、そして生きることを、教育学の言葉で深くとらえなおすことです。いわば、教育の深みに分け入ることです。(i頁)

一般的にキーワード解説の類の本は、あれもこれも「重要な」タームに気を配りすぎるきらいがある。そういった本の読者は、種々の語の群れが形づくる前景に気を取られ、それらの語群が根をおろしている本質の部分に気付かないまま、諸タームの群生する深い森へと迷い込んでしまうか、あるいはその本をある種の字引として使用するにとどまってしまうことであろう。比して本書は、そのような解説本に成り下がることのないよう、さまざまな仕掛けを用意してくれている。そして、そういった装置こそが、読者を教育の深みへといざなうものでもあり、この本に新しきをもたらすものでもあるのだ。

では、本書が入門書・概説書として他のものから一線を画すものであるその仕掛けとは何なのか。ひとつめは、目次をざっと一瞥すれば分かる。本書の構成である。

本書は、I～IVの各4部にそれぞれ5章ずつ収められ、全20章から成っている。それ自体は取り立てて何の変哲もないものである。本書の特質が見られるのは、キーワードを軸にした編成であるという点である。「言語」、「知識」、「カリキュラム」、「人格」、「教育評価」、「公共性」、「学力」…といった、いわゆる「教育学」的なキーワードが各章の見出しとなっており、その言葉の島々が寄り集まり、「メディア」、「主体」、「関係」、「システム」という4つの群島を形成している。

これらは一見すると、事典のような目次ではある。しかし、そのように見てみれば、おかしなこと——この4つの大きなキーワードが表立って選出されていることの不思議さ——に気づかされることになる。というのも、次のように、教育のどの領域の話であるのかをわかりやすくするような振り分け方もできたはずであろうからだ。「言語」、「知識」、「人格」といったことばは「教育原理」のもとへ、「カリキュラム」、「教育評価」、「公共性」、「学力」は「学校教育」のもとへ、といった具合にである。ところが本書はそうはなっていない。むしろこれらのことばは、一般的なこの手の本では大見出しにはなりえないものですらあるかもしれない。では本書はなぜさまざまなキーワードに対し、このような区切り方をしたのか。「あとがき」には次のようにある。

本書を見ていただければ分かるように、これは一風変わった地図である。キーワードの一つ一つが、

教育という領域全体を見通す展望高地の役目を担っている。各章は、その表題となっているキーワードを観測点にして、そこから教育という領域の地形を見通した俯瞰図なのである。これらの俯瞰図を重ね合わせることで、教育という領域の地形を立体的に浮かびあがらせたい、というのが本書のねらいである。(265頁)

つまり本書は、一般的な専門分野の概説書がそうであるように、教育という領域の各パーツを切り分け、それに名を与え説明を加えるという仕方で編まれたものではない。取り上げられた各キーワードは、教育のうちのある部分を占めるものとして成り立っているのではなく、むしろそれぞれがそこから教育の全体を見下ろすことを可能にする「展望高地」となっているというのだ。その高台一つ一つから描き出された教育というものが、多層的に捉えられることによって立体地図となる、というわけである。

### 3. 教育を見渡す——はるか遠方の島とわれわれとの連続性

上で確認したねらいのとおりであるならば、本書は大層な仕掛けを構想していたようである。実は、このひとつめの仕掛けと関わってくることになるのが、本書のふたつめの仕掛けなのである。それは、各章の導入部に見ることができる。試みに、ある章の導入部を引用してみよう。

アメリカ東部に位置するマサチューセッツ州ケープコッドの沖合に、マーサズ・ヴィンヤード(Martha's Vineyard)という島がある。この島は、夏のリゾート地として知られてきたが、その名は、1947年に映画監督のS. スピルバーグがこの島で『ジョーズ』(Jaws)を撮影したことでいっそう広まった。…

このヴィンヤード島は、また他のことでも有名である。それは、この島では19世紀から近年にいたるまで、生まれつき耳が聞こえない子どもが多く生まれてきたことである。… (45頁)

この導入部をもつ章のタイトルは「カリキュラム」(田中智志)である。日本から遠く離れたアメリカの島の話が、いかにして「カリキュラム」と繋がってくるのか。

田中によれば、この島の人たちは、ろう者を健常者と区別せず、障害をもつ人として認識してこなかったという。というのも、この島の人たちは、耳の聞こえる人も聞こえない人もみな手話を学び、そのためコミュニケーションに障害を来たすことがなかったからである。手話を学ぶということを支えていたものこそが、カリキュラムであったのだ。「カリキュラムによって人びとは支えあうようになれる」(46頁)というその可能性がここに示唆されていると田中はいう。

さて、上に引用したような導入部が、われわれをキーワードの論述へと引き付けるものであることは、容易に感じ取れるだろう。その導入部は、分かりやすさも手伝って、「カリキュラムというものは、学校で勉強することを編成したものだ」、と一般にわれわれに想起させるような硬い印象をもたらすものとしてではなく、カリキュラムに対して、それがいかにつくられるべきものなのか改めて問いを起こさせるようなものとなっているのである。このほか各章の導入部には、映画、小説、詩、ドキュメンタリー、絵画など、それぞれキーワードと関連する興味深いものが用意されている。

ところで、読者の興味を引くためでしかないような導入部を第二の仕掛けと呼ぶには、あまりにありふれたものであるように思われるかもしれない。しかし既に見たように、各キーワードは、教育という領域のうちの一部でしか機能できないのではなく、それぞれが教育全体を見渡す一地点として布置されているものであった。であれば、このような導入部も当然、教育の一分野への呼び水以上の機能をもつものとなるはずである。

本書の各章に設けられた導入部は、われわれに関心をもたらした当のことがらが、いかにキーワードの本質的な部分と関わるものであるのか、そのつながりを示し、その地点に立って眺めた教育というものをいきいきと映し出すものとなっている。生まれつき耳の聞こえない人が多く生まれた島のエピソードが、カリキュラムという高台に立つことによって、はるか海の向こうの話としてではなく、われわれの身近な教育の中にも連続性を持っていることがらとして開かれてくるように論述されているのである。

#### 4. 多点観測が引き寄せる教育への問い

それでは肝心の内容へと踏み込み、これまで述べてきたような目論見や仕掛けが本論の叙述においてどう活かされてくることになるのかをみてみよう。その一例を示すために、ここでは二つの章を取り上げる。まずは「関係」という区切りのうちに収められている、13章「悪——悪の体験と自己変容」(矢野智司、163-172頁。)から。

矢野はバタイユの思想に依拠しながら、「悪」が善の反対物として捉えつくすことのできないものであることを明かす。市民道德の次元で言うような善に準じた世界をかき乱すような「悪」は、もちろん危険なものではあるのだが、他方で、そういった世界の外部を垣間見せるものでもある。すなわち、「悪の体験」は合理的な思考に対し失効が言い渡されるような地点において、打算や有用性に基づく判断を超えたところでしか出会えない他者と向かい合う契機ともなるのである。本章では、生命の深い次元に触れるような「悪の体験」とわれわれの関係を、その危うさや、われわれの心を引き付けるその魅力ともども含めて、見事に描きとられている。

ここで写し出された教育の一風景は、別の視点から眺められた教育の姿と、どのような重なり合いを見せるだろうか。続いて、「メディア」という区切りのうちに収められた、2章「知識——何のために求めるのか」(田中智志、18-29頁。)を取り上げてみよう。

知識について田中のまとめるところはこうである。われわれが生きる情報化社会における知識は広範なものとなり、それはかつての知識観からでは捉えられないほどのものとなる。それに呼応して学校は、膨大な量から必要な知識を選別せねばならなくなる。この選別された「学校知」というものが、結果的に被教育者に、自由・平等に基づくデモクラシーの原理に反するものを招くものであると暴きたてたのが、「文化再生産論」である。この他にも「学校知」には重要な問題点がある。たとえば、普段の生活では自分の知っていることを人に伝えることは何ら悪いことではないのに、試験の時間ではそれをカンニングと呼び、良くないことだとされる。これは、知識というものを所有できる私有財のように捉える知識観からもたらされたものである。しかし、このような狭い知識の捉え方では、知識の所有は人と物を

つなぐものにすぎなくなり、われわれひとりひとは孤立し、知識を介して他者が会われてくることはない。しかし、知識を共有財として捉え直せば、人と人をつなぐメディアとして知識を活かす可能性が見えてくるだろう。

さて、「悪の体験」と「共有財としての知識」という二つの全く異なる観点から描き出された教育の姿は、その観測点の違いにも関わらず、他者との出会いという、同じことがらを志向していた。われわれは、ここにひとつに重なり合う教育の像を結ぶことができる。しかし当然のことながら、ふたつのことばが描きとった教育の像は、全く同じ輪郭線で描かれたものではない。どう考えても「悪」と「知識」は全く同じ教育の像を映し出すとは思われないからだ。

「悪」と「知識」の二つを取り上げ確認したように、各キーワードはそれぞれが違う像を描きながらも互いに重なりあう部分を生みだし、教育を立体的に捉えることを可能にする。だが、観測点が多数設けられれば、一地点から見た風景の裏側を視野に収めるような風景も描かれることになる。教育を幾重にも捉えていくという本書の多層的な構造は、かえって教育の像を不安定なものにしてしまうという点も持ち合わせるようになる。しかし、むしろそれが教育というものを見つめる視点を固着させずに、またそれぞれが描く教育の像のズレが、さらなる教育への問いをわれわれのうちに起こさせるのである。本書の特質であるキーワード中心の編成という形式は、本書に課せられた「『教育』を学びほぐす」という挑戦に要請されたものであったのである。

われわれは、現実の教育を目の当たりにしたときに、「教育学」的なことばと教育の実際との乖離を感じてしまうことがある。それは教育学が追究してきた数々のことばが、教育という営みを解明しようという熱意とは裏腹に、教育という営みをばらばらに切り分け、教育の一分野においてしか機能できないことばになり果ててしまったためではないだろうか。生気を失ったことばは、あまりに広く大きな営みである教育というものに照準しかねてしまうことだろう。そこで求められるのは、教育のありのままの姿を捉えようとする事と、教育をとらえたことばをたえず問い直すことである。

本書は、各キーワードが多層的に論述されることによって、教育の生の姿を捉えていくことが目指さ

れつつも、同時にその形式が、捉えられた教育の像を保存しようとするのではなく、さらなる問いにかけることをも導き出すのである。

## 5. 教育のスタート地点へ

さて、色々より道をしてしまった感があるが、これまでの叙述において、本書の特質の大筋をつかむことはできたであろう。では、なぜ本書はそのようなねらいを据え、さまざまな仕掛けを用意したのだろうか。

この問いは、次のように言いかえることもできるだろう。本書は、教育（学）のどこに位置付けられるのか、あるいは教育（学）に対し、どのような位置をとっているのだろうか、と。

本書は、近年の教育学が、近代教育学批判、戦後教育学の反省といった一通りの仕事を終え、新たな教育（学）を構想せんという折に、産み落とされたものであるといえるだろう。これまでの教育学の成果を引き継いだであろう本書の論述の中には、「教育とはこういうものなのである」といった確定的な物言いは見当たらない。だがそれは、本書の姿勢が、各章で取り上げた数々のキーワードに対して無責任なものであるというわけではなく、むしろそれぞれのキーワードを通して、教育というものを問いに向けて開いていこうとする本書の姿勢を感じ取ることができるようになってきている。

「教育学のことばでは、教育の現実で起こっていることをこのようにとらえます」と、たしかに語ってはいるけれども、それは教育学のことばがもつ豊かさを硬直させるようにしたものではない。それらは、射程を限定し、明確に区切りを設けたことばとしてではなく、教育全体を見渡そうとする一地点として述べられているのだから。

厳密に言って、本書は「教育とはこうである」というような教本の構えをもつものではない。たとえ本書が、キーワード解説の役目を負っているからといって、近年のさまざまな教育学の取り組みによって相対化されてきた概念等々を、今更説明することに終始するものではなく、それらを含めて教育というものを絶えず問い直すことへとわれわれを導くものなのである。

本書は、これまでの教育学が学問としてそれらキーワードをどう捉えてきたのかという成果を踏ま

えつつ、これから新たに教育の深みへ分け入ろうとする者たちを、現代における教育のスタート地点へと案内するものである。

## おわりに

本書を閉じ、改めて表紙に目をやる。冒頭で触れたイラストは、本書を読み終えた者の目にはどう映るのであろうか。〈教育に関する本だからここに描かれた建物は学校である〉という具合に、イラストとその像が何を示しているのかを頭の中で即座に結び付けることを可能にしていた一回路——教育とはこ

ういうものなのだ、といったわれわれのうちに構築されていた教育なるもの——は、果たして「学びほぐす〈unlearn〉」ことができたのであろうか。少なくとも、読者の胸のうちにそのような単純な思考回路自体への疑問がよぎるようになったのならば、ある程度この本の目的は達成されたといえるのではないだろうか。

また同時に、本書のねらいがどれほどまで深く実現されたものかは、本書を手に取り、教育の深みに分け入るための地図を得た者たちが、今後どのように教育と向き合い、道を切り開いていくのか、その未来に託されているだろう。